

| | |
|---------------|---|
| Title | がん雑感 |
| Author(s) | 中野, 陽典 |
| Citation | 癌と人. 10 p17-p.19 |
| Issue Date | 1983-03-30 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/24104 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

がん 雑 感

評議員 中 野 陽 典*

がんを治療していると、いろいろと不思議に思うことが多い。がんは、きわめて多様性を示し治療の上で例外的な現象がしばしば出現する。時には自然退縮したという話まで聞いたりする。進行した場合には治療にきめ手がなく不治であること、生物学的にも未知のことが多く、現存の科学の力で層別化してもなおかつ例外が多数出現すること等から、時には神秘性を帯び、がんを研究する者のみならず一般の人の興味の対象にもなる。このような背景もあって、がんに関する研究は、現実の治療への応用がほど遠くても、希望の光のごとくマスコミにとり上げられ、重大な社会的影響をおよぼしたりする。発がんもまた興味ある現象であるが、こうだといえる現象はなく、こうである可能性が強いといった程度のことが多いので、発がん物質と称されるものに対する取扱いもまた不思議な面を持っている。以上のような点について思いつくままに少し感想をのべてみた。

〈がんの多様性〉

がんは適切な治療を施さねば不治のおそろしい病気である。これが一般のがんについての認識である。そしてお、むね正しいことであるが、このがんというのは画一化された一つの形として一般の人の頭の中にあり、この場合は何ら多様性は持っていないのである。実際にはきわめて多様性を持ったものであることは、がんについてある程度専門的な知識を持つ者以外には、あまり理解されていないことである。血液のがん、各臓器のがん（胃とか肺とか）などどれをとってもそれぞれがその発育の仕方や治療に対する反応の仕方を異にする。また血液のがんや各臓器のがんも、それぞれ個別に細かく分類され、そのおのおのが違った生物学的な態度をとる。この細かく分類されたものが宿主（がんにか

かった人）の状態すなわち年齢、性、人種、環境等によって、またまた違った態度をとる。以上をいいかえると、がんはいろいろと分類層別化されてもそれに罹患した人が一人一人異ると同じ位異るといってもよい。いろいろな類似性をもってがんを分類しても、その分類された同類項の中に必ずといっていい例外の存在するのが常である。卑近な例をとると、胃がんをその進行度にしたがってⅠ期からⅣ期まで分類して手術成績をしらべたとすると必ずⅠ期の予後が良く順を追ってⅡ、Ⅲ、Ⅳとなるが、個別に見るとⅠ期でも再発してくるものがあればⅣ期でも再発しないものがあるのである。また乳がん組織型やホルモン受容体、宿主の年齢や人種が同一であれば、ホルモン療法や化学療法に対して、大きな集団でみると一つの傾向を示しても、異なる感受性を示すものが必ず存在するのである。これは現在の科学の力では、がんをまだ適切に分類しきれないでいるというのが正しいのであろうか。

〈がんの自然退縮〉

がんが何の治療も施さないのに自然退縮するという報告があるが、これはきわめて稀なことである。事実私は20年間がんの治療にたずさわってきたけれども、がんを何も治療しないで見ていることがほとんどないということにも原因があるかも知れないが、いまだこの現象に遭遇していない。8万例に1例とか10万例に1例とか言われているが、たしかにあることはあるらしい。EversonとColeという人は全世界の医学雑誌から自然退縮したがん症例を探しだし、そのうち信頼のおける176例について報告したが、がんのうちでも腎細胞がん、神経芽細胞腫、悪性メラノーマ、絨毛上皮がん、膀胱がん、軟部組織の肉腫、骨肉腫などがその主なものであ

* 育和会記念病院副院長

った。一番多く退縮したのは腎細胞がんで31例あったが、その28例は腎臓のがんを手術でとり出した後に肺にあった転移病巣が消えたものであるという。がんと生体の勢力のバランスに起因するのか、免疫現象の一つのあらわれなのか説明すべき不思議の一つと言える。

わが国におけるがんの退縮例をしらべたのには陣内、森らの第31回日本癌学会総会の報告がある。それによると原発がん（再発してきたものや転移してきたものではない）の自然退縮例は7例で胃がん5例、膵がん1例、子宮がん1例であったという。これらの症例はがんに対して有効と考えられる治療を全く受けていなかったということである。このように全国でもきわめて少数であるが、これはがんであることが組織学的に確実に診断されていること、がんに対する有効な治療を受けていないこと、がんが縮小し臨床的に検出できなくなったことの3条件を満たすものを選ぶとこのような数になったのだと言う。

いずれにしても、がんの自然退縮とは、きわめてめずらしい現象であるといえる。

なお、がんの退縮とがんの治癒とは少し意味が異なり、退縮しても後に再発してきたり、臨床的に見当らなくても剖検でがんが見出された例もあるという。

〈がんとマスコミ〉

がんはしばしばマスコミにとりあげられる。その原因はがんによる死亡率が死因のトップであり、病気の中では人類に対する最強のそして最後の敵であるといわれているからであろうか。がんの報道に対する一般人の関心の高さを表わすものだとも言えようか。

マスコミのがん報道は、良しにつけ悪しきにつけきわめて一般人に大きな影響をおよぼしてきた。毎年癌学会が開かれるころになると、がん治療に光明をもたらす記事がだされ、いまにもがんは制圧されるのだという気持を抱かせる。報道のとおりとすればもう何度がんは治ったことか、嘆息まじりにがんの臨床医がつぶやく。だが現実はきわめてきびしく、なおがん治療の歩みは向上しつつあるとは言え遅足である。

これらの報道は、がんの多様性を無視したり、

基礎的な研究と臨床の実際をあまりにも性急に結びつけようとするところにあるのか。ある種の生薬、インターフェロンそして数々の新薬の研究段階の記事、さらに民間療法にいたるまで記憶に新しい報道があるが、その都度、患者とその家族はそれを求めて右往左往し、多くの経済的負担を余儀なくされた。関連した真面目な研究者は反響の大きさにおののき、現実の治療と研究成果のへだたりを必死に抗弁した。報道に対する反響は大きい、報道者はそれを喜んで、報道の内容に対する責任は報道した者によってはとられなかったのである。がん関連の報道は、すぐれた基礎研究に関するものであればあるほど慎重で、そして社会的影響の大きさを吟味し現実の治療と新しい研究とのギャップを見極めて、その反響には報道するもの自らが責任をもてる状態であってほしいと思うのである。一般の人がむつかしいがんの研究の奥底を理解し報道を自ら噛み砕いて理解することは困難にちがいない。極端に言えばタイトルがすべてだともいえるのである。まして不用意なまた不真面目ながん関連報道はつ、しんでほしいと思うのは当然である。

一方、がんに関する知識を啓蒙するためのマスコミの報道もある。これが多くの人を早期検診に向わせ、早期がんの発見に貢献している。その反響たるや絶大で、報道のあった数日間、検診の間合せ電話が鳴りつゞくのである。

結論を言うと一般人に対するがん関連の報道は、現実の医療水準を見極めたものであってほしいし、研究途上の事は学術論文や、学術関係の報道で十分なのではなからうか。

〈発がん剤〉

いろいろなものの発がん性が問題にされる世の中となった。タバコにはじまり、わらびから過酸化水素、さかなのこげたもの、アフラトキシンB₁等々について、貴重な実験的研究や、疫学的研究がなされた。そして多くの有罪物質が日常生活の中から抹殺されたが、不思議とタバコだけは禁止にいたっていない。タバコを吸った経験のない者にとっては、理解しがたいことであるが、がんを治療する医者の中にも、がん患者を看護する看護婦にも愛用者が多い。さら

に不思議なことには発がん物質の禁止運動をしている人の中にも愛用者が多い。嫌煙権なる新語もできて禁止運動している向きもあるが、吸っている人の近辺にいるだけでも発がん率が高いという話しにいたっては、まことにぶっそうである。

環境発がんを予防するには変異原性テストで、突然変異をおこす物質であって、しかもそれを発がんにまでもっていくプロモーター作用の強さ等が、明らかにされた物質には個々人ができるだけ近よらないことが大切なのではなかろうか。

